

馬場孤蝶

山田美妙氏を憶う

山田美妙氏を憶う

明治文学のことを言う人々は大抵、言文一致を創始した功労者としては二葉亭四迷氏を第一に挙げる。無論吾々はそれには異議はないが、併し、二葉亭とは並称する訳には行かぬにしても、山田美妙齋のその方面に於ての努力に対して一顧も与えぬというのは、公平でないと思う。

山田氏は尾崎紅葉氏よりも少々ではあるが先んじて名を成した人である。その最初の単行本『夏木立』が出た

時分は、まだ紅葉氏の作物は纏まったものはなく、美妙氏の『花ぐるま』が金港堂の小説雑誌『都の花』の巻頭を飾った時分、即ち二十一年頃には、美妙斎は硯友社の誰にも優って、花形役者であつたと僕は記憶する。美妙氏の言文一致は『です』とか『ました』という語尾のもので、一寸軽い調子のもものではあつたけれども、これも、当時の才人であつた美妙氏の新しい試みと見ることできるものであつたと思う。『花ぐるま』の一節の初めの字を仮名で大きく華文字よりの絵の形にしたのなども、なかなかの才気の表われた大胆な工夫であつたと思う。

詩の方面に於ても、美妙氏は当時の人々に先んじて、新天地を開拓しようとして努力した。二十二年に雑誌『国民之友』に出た『胡蝶』の如きは全く勇敢な斬新な突進であつたと言わなければなるまい。

美妙氏と別れた田沢稻舟女史が自殺したがために、美妙氏の人気全く地に堕ち、文壇から殆ど隠れ去つたので、それ以前の功績が全く忘れられてしまったのは、美妙氏のためにはまことに気の毒千万だと思ふ。当時は世間は固より文壇の気風さえ、古めかしいものであつたので、男女間の問題に就て冷静な観方をするだけの余裕がなか

った。そういう点は今日とは雲泥の違いである。男女間の問題はそう一概に武断する訳には行くまいという意味の言をなし吾々は『早稲田文学』の諸君から頭から叱られた。それから、十二三年もたってから、島村君と須磨子の事件が起ったのだから堅い早稲田の諸君は義理にもあのように周章せずにはいられなかつたであろうと思うと、今も尚微笑を禁じ得られない。美妙氏の中期的ものでは『鰻旦那』というのが評判が好かつたように記憶する。山田氏の晩年は、如何にも振るはなかつた。けれども、これをもって、氏が若き時分の努力を全然容認しな

いというのは、冷酷である。

明治文学の胎生期に善く働いた人として、山田美妙氏は文学史中に相当の位置を与えられて宜しい人であることは疑いがない。

日本文学電子図書館

山田美妙氏を憶う

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館